

「佐渡の昔の話」 (フュー)

一一〇

は百姓の老婆である。或年大饑饉で農作物の收らぬ事が二三年續いた、其爲め一般人民は飢餓に及んでカテ飯だに腹に満たされぬ勝ちの有様であつた、然るに此老婆は心掛のよい女で、若い時から不斷に勤儉を守つた故少しは貯へも有つた、而してこの坂道を通行人々の憐れを見て、せめて泥だけでも直す方法は無いもので有らうかと常々云ふて居つたのである。そこで佐渡には十一月の二十三日の晩に、大師講と稱へて牡丹餅を搗き、栗の木で大きな箸を拵へて御大師様に供へ、其箸で翌年大豆や小豆を畑に指すとよい作が上がると云ふて用ゐる土俗的恒例が有るのであるが、他家では牡丹餅どころではない糞園子も出来ないけれども、この婆さんばかりは此晩牡丹餅を澤山拵へて御大師様に供へ、自分も食べたが餘りが有つた、翌朝羽茂へ出る若者が二三人泥をこいで下つて来て、前を通り乍ら「婆さんお早う」といつもの如く呼んだ、さうすると婆さんは「オイ若者遠寄らんかき」と云ふと若者たちは「婆さん何んだ」とヒョコ／＼立寄りると老婆は笑ひ乍ら「何んだ餅縁餅と云ふ事があるが是は牡丹餅だ」と云ひつゝ、一つ宛大きなのを與つた、一二年夢にも見たことのない好物の牡丹餅だもの、夫は／＼大よろこびで婆さん御馳走と云ふて喰ふて行つた、若者は用事を足して歸る道で一人が「オイ今朝の如の牡丹餅を父喰いたいのう」と云ふと一人が「オイ惡るくは無いのう、時に彼婆さんは善い婆さんだジャ、何を禮にするか」と相談を掛けると一人が、

「夫にはよいことがある、彼婆さんは常に彼道の悪いのを心配してゐるが、此澤山の川原の石を一個づつ、持つて行つて道に敷いて遣らうではないか」と云ふと「夫は安いことである、よからう」と平味の四五升目の石を手に手に持ちて行き「婆さん今朝は御馳走でござつた、婆さん御前は此の道の悪い所に石を敷きたい」と云ふて居るから、今日は石を一つ宛持つて来たじや」と云ふてよい鹽梅に敷いた、婆さんは非常によこんだ、さうして此れからは誰でもよいから石を持つて来て敷いて呉れる者には石一つに牡丹餅一つを遣るから續むと云ふと、婆さん本當かと云ふてそれからは是を聞き傳へて誰も彼も石を持つて来て敷いた、遂に五六丁の間の道に石を敷いてよい道にした、之が牡丹餅坂の名の由來で現に其敷石が残つて居る。

五兵衛石像の長を切伸す

椿尾の五兵衛と云へる石工は超越した技術の所有者で有つて其作品が所々に残つて有る、嘗て京都の或寺で諸國の石工に注文して五百羅漢を作らせたが、五兵衛も注文を請けて其内數體の石像を切つて（石工は石で製作することを凡て切ると云ふ土蔵石を切る地蔵を切ると云ふが如し）送つたところが、先方で一體長の低いのが有るから、注文の寸法通り更に切て送れとの照會が有つた、五

兵衛思ふ様別に切替へて遣つては面白くないから、先方へ行つて一つ驚かしてやらんと、小鑿一挺携へて京都へ行き、其羅漢を御注文通りの長に伸ばして上げると言ひ入れたれば、石が伸びる道理があるものか、田舎石屋が言ふことを聞けと笑はれたれども、強いて其一體を手に取上げコツ／＼と何處か知らぬが鑿を當てる音がしたが、サア是で寸法通りに伸びました御檢め下さいと差出したのを見ると、元の註文通りに伸びてゐたので之を見て肝を潰して驚き感じ入つたと云ふ。是は決して石が伸びたのでは無く數理に依て高くしたのである、而して此話は今新しく述べるまでもなく昔から廣く喧傳されて居る事實である。五兵衛は文化年代の人で姓は安藤家號を五郎兵衛と云ひ現戸主十松の祖であるが、同家の長屋の椽の下には今も其未成の石像が存在すと聞けり。因に——同家には如何なる功によるものであるか不明であるが奉行様から下された長二尺五寸の一刀が保存されてあるが石切道具に添へて貢ふてあるけどの御仰せださうである。

丸山の大師（開眼を要せぬ）

多田の丸山正隆寺のお大師さんは、常に行脚する故法衣が毎年一枚づつ破れると言ふて靈驗顯著であるが、此作者は小泊の奥が平白杵彌助だと云ふ。彌助は此大師を切るに當り好物の酒を斷ち

女性を避け齋戒して一心を込め三七日を費やして仕上げ、禮拜懇にして住僧某に渡し、「法印さん此大師様には開眼はせでもよろしうござる」と云ふたので住職は笑ふて「彌助何を云ふのだ開眼をせぬうちは石同然で佛には成らぬぞ」「イヤ俺の切つた像には開眼は入らぬ」「イヤ入る」と大諍ひになつた、住職も腹を立て夫では踏んで見せると、足を舉げて踏みければ即座に足が自由を失ひ痛みて立つことが出来ぬやうになつた、爰に於て人々懼れて石像に向ひて詫び、彌助にも謝して許されたりと傳ふ。

因に記す此大師の作者に就ては説區々にして小泊では彌助であると云ひ、又椿尾では五兵衛であると爭奪戦をして居るから、今では何れが眞なるか團扇が擧がらぬ。併し丸山の正隆寺へ行つて聞いて見ると、夫は椿尾の石屋が切つたので畑野の者が上げたのであると云ふて居るから、五平の作だかと思はされる。

刀根の仇討

餘程昔の事であるさうだが、村山に刀根と云ふ居酒屋が有つて大に繁昌した、主人半太郎と云ふ人物は第一利口で仲々上手もので滑稽がお箱で、酒と共に快感を景物に賣つて花客を喜ばせたから

の座下にころがし込み置きたるを知らず、立上らんとせし時之を膝にて敷き潰し、ピチツゴ音のしたるを、サア姫は恐れ多くも君側でお尻をしたと譏奏し遂に小舟に投じて流され、小木に漂着したもので、之を祀つて后神社としたのである、故に同社氏は柏の實を食すると腹痛すると云ふさうであるが、機神さんと此傳説との筋骨がよく似て居るが、一字の違いであるから小木と小立と間違へられたものかどうか判らぬ。

再び丸山の大師に就て

多田丸山正隆寺の開眼入らずの大師さんの石像は小泊では彌助の作だと云ふて居るが、椿尾には又かういふ傳説がある、五平が其大師を切る時如何した機であつたか、大師が背に負ふて居る苞(本當の名稱を知らぬ故苞として置く)の部を途ひ切り落して仕舞つた、五平は是を苦にして食事もせず二日も三日も癡て居る、弟子は大層心配して枕元に至り「親方さんどういたしました病氣でもありませんか」と慰問したれば起き上り「いやお前にまで心配を掛けてすまなかつたが、實はあの大師さんの苞の部を切り欠かしたので、あれを置いて又別に切り替へるのも残念で、それが苦勞で癡たのであるが、どうすればよいやら」と語つた、弟子は之を聞いて「親方さんの苦勞になさるのも御尤

もであります、夫れでは其苞だけを別に拵へてうまく穿り込んだならば差支えないではありませんか」と云ひたれば、五平大いによるこび「よく其工夫を考てくれた」といふて、弟子に手傳はせ別にその苞を拵へて堀り込んだが、よく改め見れば判るけれども一寸見ただけでは少しも知れぬといふ、而して此弟子こそ誰あらう、彼重太郎の青年時代であつた、重太郎で無ければ、この智慧が出ねば細工も出来まいとの事である、サアかうなると彌助の作であるか五平の作であるか、研究問題である、イヤ五平の作を云へば、今椿尾の薬師堂にある數百の石像は立派のものである。